



「ふるさと研究活動」は、子どもからおとなまで、幅広い世代の市民のみなさんの参加により、ふるさと所沢の自然・歴史・芸術・文化・産業など、様々な分野の資料や情報を集め、調査・研究を深めてゆく活動です。「所沢のことをなんでも知りたい！」方のご参加をお待ちしております。

市役所ロビーを飛ぶアンリ・ファルマン機 所沢航空100年

1月4日（火）から所沢市役所本庁舎のロビーにアンリ・ファルマン機の2分の1復元模型が吊り下げ展示されています（写真上）。アンリ・ファルマン機（写真下）は、明治44年（1911）4月、日本ではじめて開設された所沢飛行場で最初に飛んだフランス製の飛行機です。今回展示して

いる復元機は市内に住む彫刻家柳澤飛鳥やなぎさわあすかさんが15年前に製作したもので、青森県の大型商業施設に展示されていましたが、改修工事で撤去することになり、平成21年、所沢市生涯学習推進センターに寄贈されました。今年は所沢に飛行場が開設されて100年を迎える記念の年となることから展示の運びとなりました。

復元機の大きさは、長さ6m、翼の長さ5.3m、高さ約2m、重さ60kgです。展示は6月末までおこなわれます。



アンリ・ファルマン機
フランス製、1910年型。明治44年4月5日早朝、所沢飛行場で最初に飛んだ飛行機。
乗員2名、エンジン50HP×1台（空冷回転式）、全幅10.5m、全長12m、全備重量600kg、最大速度65km/h。

※「HP」は「馬力」を示す単位

1月にご覧いただける展示など

場 所	内 容
常設展示室	所沢の歴史・民俗・自然など
メモリアルルーム	並木東小学校の「記憶」
南棟3階階段脇掲示板	写真で見る所沢の移り変わり その2
3階中央棟廊下壁 今月の航空写真	昭和30年代の所沢市全域

秋季企画展「ところざわ60年」では、市制施行後「所沢市」60年の歴史を追う三択クイズ60問を配布しました。その中から、基本となる12題を2つずつ6回に分けてご紹介します。

Q 昭和34年の新所沢団地の入居者、一番多かったのはどこからの転入者？

- ①東京都 ②埼玉県 ③神奈川県

正解 ①

入居者の9割を東京からの転入者が占めました。当時としては、水洗トイレあり風呂ありの住宅は文化生活の象徴のようなもので大変人気が高く、34年12月の競争率は、賃貸で平均5.5倍、分譲地では159倍に達したといえます。

所沢市民がこの高い競争率に勝ち残って公団建設の恩恵を受けることはごくわずかでしたが、大量に新住民が流入することにより、市は新しい活力を得ることになります。

Q 平成22年8月末現在の所沢市の人口は342,794人ですが、20万人達成は（ ）のことでした。

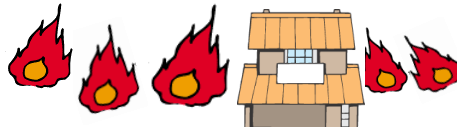
- ①昭和51年 ②昭和55年 ③昭和60年

正解 ①

この時期、市政は予想をはるかに上回る人口増との戦いでした。昭和42年には人口10万人を達成、20万人も、予想より4年も早く到達することになります。

このような人口の大膨張は、当然のなりゆきとして行政需要の増大を招きました。「東に処理場、水道、下水、西に体育館、南に小学校、北に保育所と建設に次ぐ建設をもってしてもなお不足」という状況に、市は大わらわでした。

所沢の大火



ふるさと研究市民トピック vol.19

文化15年3月（1818）に所沢を訪れた江戸の俳人竹村立義は、所沢の様子を紀行文『川越松山巡覧図誌』に書き留め、その中で「殊に先月廿三日大風の夜、火災ありて宿三の二はやけたり…」と町場の3分の2を焼失する大火があったことを記しています。このときの火災では、神明社や薬王寺、周辺家屋など142軒が焼失したと伝えられています。

所沢では歴史上いくつかの大火がありました。その後の大きな火災としては、文政10年（1827）に実蔵院と周辺家屋121軒を焼いた「弥五郎火事」、明治13年（1880）の河原宿（宮本町）で出火し66棟を焼いた火事、同18年（1885）の浦町（有楽町）から出火し、上仲町（元町）や下仲町（寿町）へも延焼し全焼

86戸・半焼4戸という火事がありました。

消防組織ができた明治20年以降は、一度に10戸以上焼失する大火はありませんでした。しかし、昭和15年（1940）10月22日未明に発生した火災は、日吉町の自動車修理工場を火元とし、全半焼17戸という大火となりました。出火原因は漏電のようで、当時の新聞報道では明治18年以来50数年ぶりの大火として報じられました。

その後、昭和23年の消防法の制定や、新たな消防組織の誕生、防火対策や消火能力の向上により類焼による大火はなくなりました。平成21年中の火災は、『消防年報』によれば136件、昔も今も出火原因のトップが放火というのは困ったものです。